

動的文法理論における現代英文法の実証的構文研究

A Dynamic Approach to Present-Day English Syntax: Empirical Studies

研究代表者 中澤和夫

Kazuo NAKAZAWA

現在の英語学研究において、様々な理論研究が盛んであるのは確かだが、いざ言語事実を詳しく精密に記述し、かつそれを実質的な内容として理論研究の中で捉えられるものは、ほとんど見当たらないといってよいと思われる。ここで、実質的な内容を理論研究の中で捉えるということの意味は、少なくともその一部として、現代英語にみられる興味深い多数の構文を、如何に子供がその言語を習得する過程で獲得できるようになったか、という問いに答える営みである、といってよい。そうした問いに答えるために、現在、ほとんどの文法理論が、大人の文法を詳しく分析することによって解答を与えようとしている。チョムスキーの極小主義的アプローチをはじめ、ラネカーたちの認知文法、フィルモアたちの構文文法もそうであるといってよいと思われる。しかし、それらはいずれも大人の文法に依拠しているというまさにそのために、言語習得の実際の過程を説明することに成功しているとは言えない。それに対して、ほぼ現在の学界では唯一、Kajita (1977) の唱道する動的文法理論 (Dynamic Theory of Grammar) が時間軸を取り入れて、子供から大人に至る過程を考慮に入れた言語習得を説明しようとしている。動的文法理論は、多様な言語現象を自然な形で記述し、そのありようを説明しようとする理論である。本研究では、この理論に基づき、様々な現代英語の構文拡張現象を実証的な形で記述・説明することを目的とする。

本研究プロジェクトは、2020年度はコロナ禍にあって対面式の研究会はできなかったもので、オンラインによって（メール交換等を介して）、4名の分担研究者による研究を行った。以下はその報告である。

後位修飾語 combined の語法と文法 —動的文法理論の観点から—

中澤和夫
青山学院大学教授

名詞を後位修飾する語（句）は、通例、関係節の縮約されたものと考えられる。(1)では、a book を修飾する関係節中の that is が WHIZ Deletion によって消されて、written by John が a book を後位修飾している。(1)は、a book written by John という名詞句の派生方式と理解できる。なお、WHIZ Deletion という規則の妥当性については幾つかの見解があるが、少なくとも (1a) と (1b) には有意な統語的關係が存在するので、WHIZ Deletion とは、そのような統語關係を表すものと理解することができる。

- (1) a. a book [that is written by John]

↓

WHIZ Deletion

↓

- b. a book [~~that is~~ written by John]

ここで取り上げるのは combined が名詞を後位修飾している例である。次例参照。

- (2) a. More particles are contained in the first receptacle than in [all the others
combined]. (Bolinger 1975: 79)
b. China is larger than [Japan and Korea combined].

(2a, b)では、一見すると、combined が、それぞれの角括弧部分において同じように直前の名詞を修飾しているように見える。しかし、実はそうではない。

- (3) a. More particles are contained in the first receptacle than in [all the others
that are combined].

- b. *China is larger than [Japan and Korea that are combined].

先の派生方式に従うなら、(2a) の元の構造は (3a) である。しかし、(2b) の元の構造と措定される (3b) は、実は非文法的である。これはどう考えたらよいであろうか。

(2b) の表面構造 [[A and B] combined] は、実は派生的な拡張構文であると考えられる。では、どのような構文拡張のプロセスであるのか、これを略述すると (4) のようになる。

- (4) Stage 1: [(all) NP_{pl} that are combined] (基底構造 (3a))
 Stage 2: [(all) NP_{pl} combined] (WHIZ Deletion 適用後の表面構造 (2a))
 Stage 3: [(all) NP_{pl} combined] (Stage 2 の構造が鋳型 (モデル) として再解釈されたもの)
 Stage 4: [[NP A and B]_{pl} combined] (Stage 3 の鋳型 (モデル) を基にした拡張形としての表面構造 (2b))

さらに (5) のような興味深い例がある。

- (5) “I just thought it would be something dope. Social networking is important,” Wale said recently to Wired.com. “Anything that’s [social and music combined] is something I want to be a part of. I’m very hands-on with it.” (*Billboard*, 12/3/11, p.15)[藤正明氏提供]

これは (6) のような拡張の結果と考えられる。

- (6) a. [[Japan and Korea] combined] (基底構造 (2b))
 ↓ 鋳型 (モデル) として再解釈
 b. [[X and Y] combined]
 ↓ 鋳型 (モデル) を基にした拡張
 c. [[[_x social] and [_y music]] combined]

この結果、(5) は次のような特殊な特徴をもつことが可能となる。

- (7) 興味深い (5) の特徴

- a. これまで combined が修飾していたのは、いずれも指示を持つ名詞句 (referential NP) だったが、combined が修飾しているのは述詞 (predicative)

である。

- b. さらに興味深いのは、等位接続されているのは形容詞 *social* と名詞 *music* である。
- c. 通常の文法規則では形容詞と名詞を等位接続できないが、両者とも述詞という、同じ機能範疇ゆえ等位接続が可能となった。
- d. 通常の文法規則では形容詞と名詞の等位接続を関係節で修飾などできないし、よし述詞として等位接続できたとしても、それを関係節が修飾するのは到底不可であるが (**Anything that's [social and music that are combined]....*), (6) の拡張プロセスの考え方に基づくと、(5) も可能形として現れる。

こうして、非常に特殊な構文 (5) は、動的な構文拡張の結果と考えられる。

参考文献

Bolinger, Dwight. 1975. "On the Passive in English." Adam Makkai and Valerie Becker Makkai (eds.) *The First LACUS Forum 1974*, 57-80. SC, USA: Hornbeam Press.

[研究報告 2]

関係詞の相対的結合力について

河野 継代
東京学芸大学名誉教授

英語には形態の異なる三種類の関係詞、ゼロ形、*that*、*wh* 形、がある。これら三種類の関係詞は先行詞との結合力がそれぞれ相対的に異なると思われる。

(A) 関係詞の相対的結合力についての仮説

英語の三種類の関係詞の中で、先行詞との結合力が最も強いのがゼロ形関係詞であ

り、逆に最も弱いのが **wh** 形であり、**that** はその中間である。

仮説 (A) を支持する証拠はこれまでにいくつか示されている (河野 (2012, 2016) 参照)。

そのひとつに二重制限節における関係詞の生起順序がある。仮説 (A) が正しければ、二重制限節においてゼロ形と **that** が共起した場合には、先行詞との結合力がより強いゼロ形がより弱い **that** よりも先行詞に近い位置に生起するはずで、この予測は言語事実と一致する (河野 2012: 150)。

- (1) a. The book Bill bought that Max wrote was boring.
b. *The book that Bill bought Max wrote was boring. (Weisler 1980: 627)

したがって、二重制限節に関する上記の事実は仮説 (A) を支持する証拠となる。

英語には上記のような二重制限節だけでなく三重制限節もある。三重制限節とは、同じ先行詞に3つの制限節が接続詞なしに連続して生じている関係節のことである。仮説 (A) が正しければ、三重制限節においても関係詞の生起順序は (A) の仮説に従っていることが予測される。事実はどうであろうか。次例を見てみよう。

- (2) To say that the book [which you have not opened], [which you have not read], [which you do not possess], offends you seems to me to be not just a peculiar position but a reprehensible position. (The Sunday Times 941002)

この例は **wh** 形の関係詞 **which** が3つ連続して生起している例で、仮説 (A) の予測と矛盾しない。というのは、仮説 (A) は同じ種類の関係詞が連続して生起する可能性を排除しないからである。

では、異なる種類の関係詞が三重制限節に生起している場合はどうであろうか。次例を見てみよう。

- (3) He wished there were someone [he knew in school] [he could show the drawing to] [who would appreciate it]. (Irwin Shaw. 1976. Rich Man, Poor Man. p. 61)
(4) And there was that one dark fact [no one mentioned], [that he himself had not dared to ask], [that Don Corleone ignored]. (Mario Puzo. 1969. The Godfather. p.303. (梶田 1990))

(3) では、第一関係詞と第二関係詞はどちらもゼロ形なので、仮説 (A) の予測と矛盾しない

い。また、第二関係詞と第三関係詞の生起順序は仮説 (A) の予測と一致している。というのは、第二関係詞のゼロ形は第三関係詞の *wh* 形よりも相対的に先行詞との結合力が強く、前者のほうが後者より先行することが予測されるからである。

(4) では、第一関係詞がゼロ形で、第二関係詞が *that* であるので、仮説 (A) の予測と一致している。先行詞との結合力が相対的に強いゼロ形の関係詞のほうが相対的に弱い *that* よりも先行しているからである。第二関係詞と第三関係詞はどちらも *that* なので、仮説 (A) と矛盾しない。

以上、三重制限節の関係詞の生起順序は、どの二つの関係詞の組み合わせをとってみても、仮説 (A) と矛盾しないことを示した。したがって、仮説 (A) は三重制限節の言語事実によっても支持されることになる。これで、仮説 (A) を支持する証拠がまたひとつ増えたことになる。

参考文献

- 梶田優. 1990. 「範疇、意味、文法関係—述語名詞表現とその「関係詞化」—」『英語の実証的研究にもとづく文法理論の比較研究』平成元年度科研費研究成果報告書, 60-73.
- 河野継代. 2012. 『英語の関係節』東京: 開拓社.
- 河野継代. 2016. 「関係詞の選択と限定修飾力」『英語語法文法研究』第23号, 86-101.
- Weisler, Steven. 1980. "The Syntax of *That*-less relatives." *Linguistic Inquiry* 11, 624-631.

[研究報告 3]

As/Though 譲歩構文の派生的展開

牛江一裕
埼玉大学名誉教授

次のような As/Though 譲歩構文には以下に見るように順次的な展開と捉えることができる現象が観察される。それらを動的文法理論の視点から考察する。

- (1) Intelligent as John is, he can't figure out how this works.
 (2) Intelligent though John is, he can't figure out how this works.

これらはよく似ているのだが、出所・起源が異なる。(1) は古くは (3) の形式であり、同等比較と同じ形式から前の *as* が落ちて現在の形になった構文である。

- (3) The world, as censorious as it is, hath been so kind, etc.

(2) の形式は OED で見る限り 1840 年が初出で、比較的新しい構文であり、もともと譲歩を表す *though* が *as* による譲歩構文をモデルとして移動規則により (2) の形式で用いられるようになったという可能性がある。(1) の形式には移動の基となる形が存在せず、移動規則によって派生されたものではない。その出自の違いが性質の違いとして現れる。

(1) は同等比較と同じ形式から派生したものであるとすると、形容詞と用いられるのが基本的な形であると考えるのが妥当である。*as tall a boy as ...* の形式は後になって現れる。子どもの言語獲得の際には言語資料として *as ... as* の形式が資料として与えられないので、歴史的変化の過程をそのまま繰り返すわけではない。移動規則で生成されたのではない、そのままの形式で憶えるということになる。その際には形式上の特徴がその後の拡張においても色濃く反映される可能性が高い。

(1) における形式上の特徴を挙げると、① *as* の前は形容詞、それは② *as* の前は Head (主要部) (で始まる)、③ *as* の前は動詞 *be* の叙述補部として働いている、そして④ *as* の後ろの動詞は *be*、等がある。(1) から、これらの特徴を持つ (4) の形式に拡張する。

- (4) Beautiful swimmer as she is, she refuses to compete.

この場合無冠詞であることが特徴で、①を守っていることが一つの要因であろう。それに加え、叙述名詞が不定冠詞を含む場合にのみ *as* の前に現れうることから、無冠詞でも復元可能性を維持していること、さらに歴史的に比較級の *as NP as* で、冠詞が落とされることがあったことも関係している可能性がある。

③の叙述補部であることにより、②から④を守って叙述名詞句にも拡がる。

- (5) *(A) genius as John is, he can't figure out how this works.

Culicover (1982) は *As/Though* 譲歩構文いずれに対しても X^1 レベルの要素が移動されるとしているが、なぜ X^1 レベルの要素が *as* や *though* の前に現れるのかが問題である。②は

それに対する解答を与える。②を守ってさらに主要部+補部、つまり X^1 に拡張すると考えられる。

(6) Surprised at John's remarks though Mary was, she said nothing.

英語においては Head で始まる構成素は X^1 である。

②③④を保持して形容詞句、名詞句と機能的に同じ前置詞句にも拡張される。

(7) In trouble as he is, John still smiles bravely.

さらには④を守り動詞句にも拡張する。

(8) Sleeping soundly as he was, the noise eventually woke him.

(7) や (8) への拡張には意味的な要因も絡む。形容詞を伴った (1) が持っているもう一つの性質として、⑤ as の前の要素は段階性を持つ、ということが挙げられ、前置詞句や動詞句でもその性質を持つものは容認度が高くなる。ただし、動詞句でも be があれば必ず前置できるというわけではなく、他の要因が複雑に絡み合い、状況は一律ではない。

ここで as と though で微妙な差が出るという指摘がある。

(9) Get sick though/*as he did, John still enjoyed the trip.

この差は as が④の性質を though より強く求めることによるように思える。Though 譲歩構文は移動規則により派生されるが、as 譲歩構文はそうではないことにその理由を求めることができると思われる。移動規則は構成素を広く対象とするため、though のほうが be の存在に左右されにくい。ただ as でも動詞句が助動詞の do を伴って容認される場合がある。

(10) Try as I might/would/did, I couldn't solve the problem.

この文は However hard I tried と言い換えることができ、譲歩ではあるが意味的にやや異なる。起源的にも異なるため、現時点では別の構文として扱う方がよさそうだが、共時的には何らかの関係があるかもしれない。

このように、いくつもの性質が束として存在する形容詞を基本とした構文が、ある性質を

欠くがそれ以外の性質は保持した少し異なる形式に拡張し、それが次の段階で別の性質を欠いてさらに別の形式に広がる、あるいは、ある性質を手がかりとしてその方向で拡張する、という現象がAs/Though 譲歩構文に見られることは明らかである。形容詞句、名詞句、副詞、前置詞句、動詞句それぞれにおいて良い場合からだめな場合まで様々な段階性がある。同じ構文でも、容認度が落ちる、頻度が落ちるなど、周辺的であるものは確実に存在し、たとえばある範疇の移動規則として一律の規則で扱うことは不可能である。

参考文献

Culicover, Peter. 1982. *Though-Attraction*. Indiana: Indiana University Linguistics Club.

[研究報告 4]

連結詞分布に課せられた制約について

藤 正明

東京海洋大学教授

1. はじめに

理論言語学を構成する多様な研究領域における一般化は、通常それぞれの研究領域内で記述・説明が行われるのみである。しかし、そのような一般化の中には、他の研究領域において、偶然とは思えないほど類似しているものが存在している場合がある。

本稿では、言語類型論で発見された連結詞分布を支配する含意的普遍特性が、他の様々な研究領域においても働いているという事実を指摘するとともに、動的文法理論による説明の可能性を示唆する。

2. 言語類型論における連結詞化に課せられた制約

Pustet (2003) は、(1) のような範疇階層上に、(2) のような含意的普遍特性が存在すると主張している。(1) の範疇階層は、それぞれの範疇が指示する事象がどの程度継続す

るのか（つまり、経時安定性の尺度）により、並べられている。範疇階層中の関係 $X > Y$ は、「 X は Y より経時安定性が高い」と解釈する。また、Pustet (2003) に従い、連結詞化という用語を、述部に連結詞が伴って現れるような用法を指すものとして使用する。

(1) $NP > AP > VP$

- (2) もしある言語において範疇階層 (1) のある範疇が述語として使用される場合に連結詞を要求するならば、その範疇の左側に出現する範疇も、述語として使用される場合は、必ず連結詞を伴う。(連結詞を必要とする範疇と連結詞を排除する範疇との境界を分割点と呼ぶことにする。)

例を挙げると、ビルマ語では NP だけが連結詞を要求し、 AP と VP は連結詞を使うことはできない。すなわち、ビルマ語の連結詞化の分割点は NP と AP の間にある。また、ドイツ語の分割点は概ね AP と VP の間にあると考えられる。つまり、ドイツ語では NP と AP のみが原則的に連結詞を要求する。実は、このような類型論で発見された一般化が、他の研究領域でも見られることを次節で指摘する。

3. 連結詞分布を支配する含意普遍特性の広がり

3.1. 社会言語学分野における連結詞化

アフリカ系アメリカ人による日常英語 (AAVE) では、(3) のような範疇階層上に、(4) のような含意的一般化が存在するとされる。(cf. Labov 1969)

(3) $NP > AP > VP$

- (4) AAVE の連結詞化に関わる範疇連鎖 (3) において、ある範疇が連結詞化される割合は、その範疇の左側に存在する範疇が連結詞化される割合より常に低い。

これは、AAVE においても、(3) の範疇階層で左にある範疇ほど、その範疇が連結詞とともに使われる可能性が増大することを意味している。つまり、AAVE でも、類型論で提案されたものと類似の一般化が存在していることになる。

3.2. 通時言語学分野における連結詞化

さらに、AAVE を母語とするコミュニティにおける連結詞使用の変化を調べた通時言語学的研究によると、世代間の連結詞使用の変化が、上記の (3) の AP を、経時安定性の尺度を使い、さらに二分割して作られた階層 (5) により自然な最小の変化として記述できることがわかった。

(5) $NP > AP_{IL} > AP_{SL} > VP$

より具体的には、ある AAVE コミュニティで、第 2 次大戦前世代では、両 AP が連結詞化の割合において VP に対して同等に高かったのに対して、第 2 次大戦後世代では、局面レベルの AP (AP_{SL}) だけがその右側の VP と同等の連結詞化比率にまで落ちていたという言語変化が報告されている。(cf. Cukor-Abila 1999)

3.3. 言語習得分野における連結詞化

英語の母語話者を親に持つ 2 歳児の発話データを分析すると、範疇階層 (5) において、左端の NP が連結詞とともに使われる頻度が最も高く、右に行くに従って、連結詞とともに使われる頻度が減るという結果が得られた。特に重要なのは、英語を母語とする 2 歳児の段階では、個体レベルの AP が連結詞とともに使用される割合と局面レベルの AP が連結詞とともに使用される割合を比較すると、前者が後者に比べて非常に高いという観察が報告されている。(cf. Becker 2000)

3.4. レジスター変異における連結詞化

最後に、以下の海事口語英語の例からわかるように、短縮レジスターの一種である口語英語レジスターでは、ステージレベルの形容詞句や現在分詞・過去分詞を中核とする動詞句が述部に使用された場合、現在時制の連結詞が頻繁に脱落する。

- (6) a. MV Victor __ aground. (SMCP:31)
 b. MV Victor __ proceeding to your assistance. (SMCP:32)
 c. No ice __ located in position 56°90'N, 178°13'W. (SMCP:38)

しかし、筆者の調査によると、述部に個体レベルの AP や NP が用いられると、容認度の著しい低下が認められた。

- (7) a. “Is the ship’s funnel blue or yellow?” – “*The ship’s funnel __ blue, sir.”
 b. “Is MV Victoria a passenger ship or a tanker?” – “*MV Victoria __ a tanker, sir.”
 c. “Is the vessel’s flag state Panama or the Netherlands?” – “*The vessel’s flag state __ Panama, sir.”

以上の事実、階層（5）を仮定し、口語英語レジスターにおける分割点を、 AP_{IL} と AP_{SL} の中間に位置すると仮定すれば、記述することができると考えられる。

4. 領域横断的な普遍特性の導出に向けて

領域横断的に見られる連結詞分布の規則的偏りを統一的に説明することは可能であろうか。統一的説明にとって最も問題になると思われるのは、連結詞分布の規則的偏りが広範囲に及んでいることであろう。特に、方言変異だけでなく、一個人の中でのレジスター変異にまで広がっていることが重要である。このような変異の広がりを原理とパラメーターだけで説明することは難しいと思われる。一方、動的文法理論では、以下のような説明の方向性が考えられる。

まず、連結詞は動的な過程で派生的に導入されるとする。連結詞を導入しない場合は、タガログ語タイプが出現する。

第二に、連結詞が導入される場合は、最初に、最も経時安定性の高い NP を持つ述部に導入される。そして、一旦導入された連結詞は経時安定性の高い述部からより低い述部へと徐々に広がっていくとしてみよう。このように考えると、範疇階層（5）と含意一般化（2）が帰結として導出できる可能性がある。

第三に、習得途上の子供は、入力データの量や質及びその他の要因で、親の連結詞拡張の場合とは異なる到達点まで拡張することがある。連続する二世代の拡張の到達点異なる場合、その異なり方は一般に非常に小さな差異となるはずである。こう考えれば、AAVE の微細な言語変化に説明の道が開かれる。

第四に、言語におけるレジスター変異の存在そのものが、大人の I 言語は一枚岩ではなく、部分的に異なる複数の文法集合から構成されていることを示している。それらの文法群は ‘is based on’ の関係で相互に結びつき、最も遠くまで拡張した文法（原則的に標準文法）を除くと全て短縮文法からできていると推察される。もし言語習得途上で形成された中間段階の文法が大人の I 言語でも照会可能な形式で残存しており、コミュニケーション上の圧力により、手短な発話が求められるような環境では、そのような中間段階の文法を照会して、言語活動を行うことができるとすると、口語英語でなぜ幼児英語のような連結詞化制約が存在しているのかを説明できる可能性が出てくるものと思われる。

参考文献

- Becker, Misha. 2000. *The Development of the Copula in Child English: The Lightness of Be*. Doctoral Dissertation. University of California, Los Angeles.
- Cukor-Abila, Patricia. 1999. "Stativity and copula absence in AAVE," *Journal of English Linguistics* 27, 341-355.
- Labov, W. 1969. "Contraction, deletion, and inherent variability of the English copula." *Language* 45, 715-762.
- Pustet, R. 2003. *Copulas: Universals in the Categorization of the Lexicon*. Oxford: Oxford University Press.

言語資料

- IMO Standard Marine Communication Phrases (SMCP) -Book and CD. 2002. International Maritime Organization.